

日光国立公園

奥日光地区事例紹介

(国際観光地「日光」活性化対策事業
「てくてく歩こう奥日光」整備状況)



栃木県林務部自然環境課

1. 背景

日光は、そのもつ特色から「世界の日光」として国内外の多くの人々に親しまれ、本県を代表するイメージとして定着している。

しかし、時代の変化に伴い大衆的な観光地に変貌する中で、行楽時の交通渋滞、宿泊施設等の老朽化、自然環境の悪化等により、次第にかつ

での地域特性が失われるとともに、地域イメージの低下を招くこととなった。

このため、昭和62年の日光自然博物館の建設計画をはじめとする国際観光地「日光」活性化対策事業や奥日光緑のダイヤモンド計画により、個性ある地域づくり・自然公園づくりを実施した。

○歴史的背景

- ・782年(奈良時代) : 勝道上人が男体山を開山
- ・明治中期から昭和初期 : 国際避暑地として繁栄する。
- ・昭和9年 : 日光国立公園として指定を受ける。
- ・戦後から現在 : 観光地として周遊観光の拠点となる。
交通渋滞問題、施設の老朽化等の問題が発生する。

○自然的背景

- ・男体山をはじめとする火山群とそこから湧き出す豊富な温泉、火山が生み出した湖や湿原、いくつもの名瀑を作りながら流れ落ちる河川など変化に富んだ自然が、豊かな生態系を育てている。
- ・中禅寺湖畔は、湖岸線に雑然と並ぶボートと棧橋等により、親水空間を阻害し、国立公園の核心地域として憂うべき状況であった。
- ・シカの増加に伴い高山植物等の食害が発生した。



整備後の湖畔園地

2. 目的

奥日光地域は、豊かな自然景観と多様な生態系を有する日光国立公園の核心地域であり、この貴重な自然環境を保全しつつ、国民の保養・休養の場と

しての景観の保全・創出や、自然体験への誘導を図るための情報提供が大きな課題となっていた。

このため、奥日光の自然・歴史資源を保全しながら、日本を代表する国立公園としての質の高さを創り出すとともに、日光を本来の姿に蘇生させることを目的として小田代原の自然環境の保全や視点場と視点対象の整備として、中禅寺湖湖畔整備、イタリア大使館別荘記念公園、西六番園地等を「てくてく歩こう奥日光」をテーマとして整備を行うことにより、地域の活性化を目指した取組を行ったところである。



イタリア大使館別荘記念公園

3. 整備経緯

昭和62年度、本県は、日光国立公園を訪れる人々に、自然や文化の情報を提供し、地域振興を図るため、「日光自然博物館」の建設を計画し、平成元年度から建設に着手した。

この日光自然博物館の建設事業を契機として、奥日光の若手経営者等による将来の奥日光のあり方について検討する「奥日光リフレッシュ21」が組織され、奥日光の抱える課題の克服の方策を模索し、奥日光の活性化計画について検討がはじめられた。

地域づくりの主役は、日光に住み、日光の自然を守り、歴史・文化を育む地域の住民であり、このため、具体的な事業の実施は、住民の合意のもとに立てられたプランを実施するものでなくてはならず、地域住民の合意形成に多くの時間と労力を要した。

地元においては、「奥日光活性化委員会」を組織し、また、行政サイドにおいては、日光市長を会長として、地元代表、学識経験者、行政実務者、事業者からなる「日光活性化協議会」を組織し官民一体となり、事業計画及び各種整備を行った。

(1) 工事経過

奥日光中宮祠地区の活性化基盤事業は、平成元年度から事業に着手しており、第1期工事として、「日光自然博物館」の建設工事からはじまった。

第2期工事としては、交通渋滞対策として、平成5年度から山側道路の拡幅整備、駐車場整備、駐車場から湖畔までの園路整備を実施した。第3期工事は湖畔の景観整備として、平成8年度から「緑のダイヤモンド計画」と一体となり、視点場及び視点対象の整備として湖畔園地、近代遺産整備、湖畔道路及び電線の地中化工事を実施した。

湖畔園地鳥瞰図

(2) 湖畔整備

中禅寺湖畔の中心である湖畔園地は、ボートや老朽化した棧橋等により園地として機能されておらず、また、国道に面し駐車場があり、車の出入りによる交通渋滞や駐車場が私物化され利用者とのトラブルがあいつぎ、地域イメージを低下させていた。

このため、美しい湖畔、歩ける湖畔を再生することを第一として、山側道路沿いの男体駐車場を増設し、湖畔駐車場の撤去を行い、跡地をプロムナードとして再生させ、また、プロムナード内に電線の地中化工事を行い景観の保全を図った。

園地中央部は、交通拠点ゾーンとして、男体駐車場からのアクセス園路整備や園地東側にあった遊覧船乗り場を園地中央部に移転整備し、また、新たな視点場として展望デッキ等の整備を行った。

湖畔園地内には約30基の棧橋が乱立して、景観を阻害していた。このため、ボート棧橋、漁船用棧橋の統合化を行い新たな景観の創出・保全を図った。

棧橋の統合化においては、ボート事業者と個別の折衝を行い、最終的には、ボート事業者で62.5%、全体で78.6%の棧橋が集約できた。(棧橋の統合化に伴い、統合化に応じたボート事業者の個人営業の廃止と組合化を図った。)

区 分

事業者数

統合者数

統合割合

ボート事業者

16名

10名

62.5%

ボート事業者以外

12名

12名

100.0%

計

28名

22名

78.6%

- ・ 棧橋の統合化、組合化により手こぎ、足こぎボートが約100隻減船となった。

(3) 奥日光の近代遺産整備活用

中禅寺湖畔は、明治中期から昭和初期にかけて、各国の大使や政府高官など国内に居住する外国人の別荘が立ち並ぶ国際避暑地として賑わった華やかな歴史を有する地域であり、我が国における国際的なリゾート地としての草分け的な存在である。これらの近代遺産を活用した地域活性化等の取組を行った。

イタリア大使館別荘記念公園

イタリア大使館別荘は、昭和3年に中禅寺湖南岸に著名な建築家であるアントニン・レイモンドにより設計され建設された。

本施設は、奥日光の国際避暑地の歴史の足跡を残す数少ない建築物であり、平成9年までは、歴代在日イタリア大使の夏季別荘として使用されていたが、老朽化が著しく、平成10年2月に県が取得し、中禅寺湖畔の歴史・自然とのふれあいの場として再整備を行った。

歴代大使が使用していた本邸は、内外装杉皮葺の建物であり、一階は、中央の居間を中心として、その両側がそれぞれの暖炉を持つ書斎と食堂で構成された当時としては珍しいワンルームとなっている。各部屋は湖を一望できる広縁に通じており、避暑地生活を彷彿させる開放的な空間とな

っている。このため、整備にあたっては、中禅寺湖を眺める視点場として、建設された当時の姿に復元することとした。



イタリア大使館別荘内部写真

西六番園地

幕末から明治初期にかけ貿易商として活躍したトーマス・B・グラバーが中禅寺湖畔の大崎に「西六番別荘」と呼ばれる別荘を建て、その後社交場として使用されていたが、廃屋となり、景観を阻害していたため、当時の雰囲気を感じられる園地として景観整備を行った。



整備前の状況

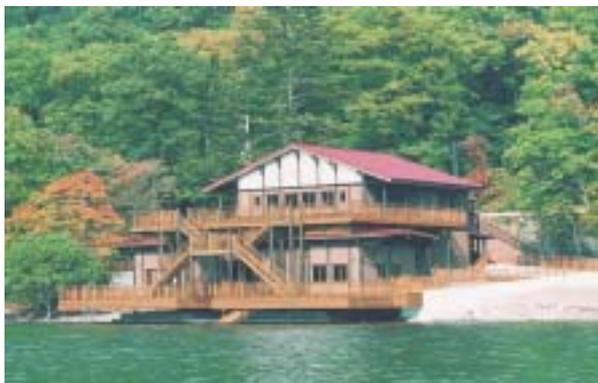


西六番園地(整備後)

中禅寺湖畔ボートハウス

昭和22年に進駐軍の調達要求に応じ建設された建物で、進駐軍の統治下統化における日米親善交流施設として使用され、米国の水辺リゾート地の建物をモデルとして建築された本施設は、シンプルで洗練されたデザインが中禅寺湖の風景の点景となっていた。今回の再整備においては、建築当時

の用途を伝える施設として、また、中禅寺湖周回線歩道の休憩施設として、建てられた当時の姿に復元を図った。



中禅寺湖畔ポートハウス

4. 整備効果

湖畔園地においては、プロムナード、電線地中化等の整備により、商店街と湖畔の景観につながりができ、湖畔園地では、湖畔の散策や景観を楽しむ来訪者が増加している。

湖畔周辺整備により、商店街においては、整備前と比較すると強引な客引きは減ってきており、湖畔の駐車場と商店の往復しかできなかった利用者が、地区内での活動が自由になり、行動範囲、滞留時間とも増加し、湖畔本来の散策や風景を楽しめるようになった。

年度	行動範囲	滞留時間	行動内容
96年	192. 2m	60分	見学中心
99年	649. 0m	107分	散策中心

(宇都宮大学 永井教授調査)

このように来訪者の行動が変化したことに伴い、地域住民も来訪者のニーズに対応しながら顧客満足を高めていく必要性を認識してきている。

湖畔園地の整備に伴い、街並みを一望できる視点場ができ、地域住民の街並み景観に関する意識も向上してきている。

イタリア大使館別荘記念公園もテレビ、ラジオ、雑誌等のマスコミに取り上げられ、全国から多くの利用者が訪れている。

5. 今後の課題

国立公園の集団施設地区となっている、中禅寺湖北岸においては、基盤整備が昨年度で終了し、今後は、地域住民が中心となって、整備された施設を活用しながら、利用者を受け入れるためのホスピタリティーの向上に取り組む必要があり、これからは本来の地域活性化であると考えている。また、国立公園の景観整備を通じた地域活性化についてもその真価が問われることともなる。